

「実るほど頭をたれる稲穂かな」。稲は秋になり実が詰まってくると、穂先が重くなつて下に垂れてきます。人は成功を収め、地位、名誉、財産、権力を手にすると、知らず知らずのうちに高慢・横柄になり権力を振りかざすようになります。成功した時ほど頭を低くし、謙虚さと今あることへの感謝を忘れるなという戒めを込めた格言です。Yさんがセミナーの講師として駆け出しだったある時、大手企業の経営者の集まりに招待されました。ホテルでの講演終了後、主催者である七十代の経営者K氏から、「今日はあなたのために特別室を用意してありますので」と言われました。

部屋のままで案内され、「ここで結構です」と自分で部屋に入ろうとしたところ、K氏が先に部屋の中に入り、若いYさんを床の間の前に座らせ、お茶を入れ始めたのです。苦勞の末に会社を築き上げたK氏であり、年齢も親子以上に違つたYさんは、その態度に恐縮し、「私に入れさせてください」とお茶を入れる手を遮りました。

するとK氏は「Yさん、何を言っているんです。今日の主役はあなたでしょう。それに私は『商人』です。全ての人間がとは言わないが、ややもすると経営者は少し成功すると偉そうになつてしまつて、苦勞したときのことや人から助けてもらったことを忘れてしまう。商売を始めた時は頭をぺこぺこ下げ、少し上向きになると次第に頭が下がらなくなり、しまいにはふんぞり返るようになります。私は店に来られた方だけをお客様と思つていません。店の前を通る人も見込み客であり、列車で隣に座つた人も



## 商人の道は冒険の道 安住を求めなけれ

え・牧えみこ

将来のお客様かもしれない。また、その人の家族や友人だつて、いつかはお客様になつてくれるかもしれないのです。もつと言え、社員さえも仕事が終わればお客様です。要するに私以外は全てお客様なんです。だからすべての人に感謝するんです」と言うのです。この時、Yさんは冒頭の言葉を思い出したのでした。

セブン&アイグループの創業者・伊藤雅俊氏は、「商人の道」という文を名誉会長室に掲げているそうです。

農民は連帯感に生きる  
商人は孤独を生き甲斐にしなければならぬ  
すべては競争者である  
農民は安定を求める  
商人は不安定こそ利潤の源泉として  
喜ばなければならぬ  
農民は安全を欲する  
商人は冒険を望まなければならぬ  
絶えず危険な世界を求め  
そこに飛び込め商人は利子生活者であり  
隠居であるにすぎぬ

(中略)

我が歩む処そのものが道である  
他人の道は自分の道ではないと云つことが  
商人の道である

「経営者は孤独を生き甲斐とせよ。不安定を喜び、安住を求めるな」とは、じつに厳しい「道」です。しかし、ビジネスにリスクはつきものであり、全てを失うこともあるという覚悟、生死を賭けた真剣勝負、生半可ではない迫力、これらから真の感謝や謙虚さ、畏敬の念が生まれ、勤が働き、無限ともいえる英知が沸き起こってくるのです。自身の「道」を究めていきましょつ。